

〔新著聞集七〕勇烈女、夜盜しげどろを擒

江戸堀江町の米やへ夜盜入り、亭主を切り殺しけるに、妻起出て聲を立しかば、盜人逃出、中戸をくゞる處を、追かけ、足を捕へて引けるに、戸はづれて盜人の上に倒れしかば、頓て壓へながら、大音して生捕たりと呼はりしに、人々あつまりて拵カラダける、此ものは、王子の與樂寺の住持を殺せし古著ふるき長左衛門といふ強盜なり、與樂寺は此女の伯父なり、夫と伯父との敵を、女の身として生捕しは、因果のがれがたき道理にて、さも勇なる振まひやと、譽感せざるはなかりし、

〔黒田故郷物語〕扱程へて、餘人無奉公の次第に、たわけめが、晝盜みの仕様をえらぬぞ、自今以後は心懸、晝盜をせよと、異見仕候へど、おとなしき者に被申聞に付、律義に御奉公仕候へところ可被申聞候へ、盜を仕候へとは異見難成、不思議成事を被仰出候と、いかにも不審をたて、さからひて申ければ、合點せぬか、晝盜みの仕様にわけの有事ぞ、先壹人にて分別して見よ、伊藤次郎兵衛めは五七年も召仕、八十三石とらせても、不足に思はぬ者也、略下

竊盜

〔伊呂波字類抄見倫〕竊盜ミソカヌスビト

〔倭訓栞中編二十五〕みそかぬすびと 枕草紙に見ゆ、和名抄に竊盜をよめり、今やじりきりといふ類なり、

〔和漢三才圖會十〕人倫之用、盜人略中

竊盜和名美曾加奴家尻切ヤジリキ 夜穿墻壁、盜資財者、謂之家尻切、

〔續日本紀十六〕聖武天平十七年五月戊辰、是時甲賀宮空而無人、盜賊充片、火亦未滅、仍遣諸司及衛門衛士等、令收官物、

〔古今著聞集十二〕倫盜元興寺といふ琵琶、左右なき名物也、紫檀のこう、ふと絃、ほそ絃あひかなひて、音勢も有て目出度比巴にてぞ侍ける、伴の比巴はむかし、彼寺修理の時、用途のために其寺の別當